



本当にこれでいいのですか —イラクへの自衛隊派遣を考える—

情報広報部長 中川俊男

イラクへ派遣された陸上自衛隊北部方面隊第二師団の駐屯地、旭川市で「黄色いハンカチ運動」が起きている。高倉健主演の映画「幸福の黄色いハンカチ」に倣^{なら}って、自衛隊員の無事帰還を祈るためだ。市民が黄色いハンカチを身に着けたり、市内の各所に黄色いハンカチが掲げられている。

私にとって陸自の旭川駐屯地は懐かしい。子供の頃、学徒出陣で2年間のシベリア抑留経験をもつ父の大きな自転車の後ろに乗せられ駐屯地の共済売店に連れて行かれた。そこで食べたカレーライスの味がよみがえる。なぜ父は戦争の傷を思い出すであろう駐屯地へ何度も自分を連れて行ったのだろう。他界した今では問うこともできないが、そこでの父は確かに私に何かを伝えようとしていた。「ソ連という国は善くはないが、出会ったロシア人は純朴でいい人ばかりだった」と遠くを見ていた。

2月9日、参議院本会議で自衛隊のイラク派遣に関する国会承認が可決された。日本は歴史的な転換点を通過したことになる。この直前にイラク南部のサマワに到着した陸自の隊長は「われわれは復興支援部隊である。治安維持部隊では断じてない。」と訓示したが、日本は米英軍を中心とする占領軍に加わったことになった。本当にこれでいいのだろうか。

これに先立つ1月31日、衆議院本会議での自衛隊イラク派遣国会承認の採決において波紋を広げる事態が起きた。自民党の加藤紘一氏と古賀誠氏が棄権し、亀井静香氏が欠席したのだ。3氏につ

北海道医報購読料年間3,000円。北海道医師会員にあっては会費の中に含まれています。

いては派遣された自衛隊員に犠牲者が出た時の政局を意識しての布石という見方もあるが、それを割り引いても幹事長、政調会長経験者の行動には「政治家としての凄み」を感じる。また昨年の自民党総裁選挙に際して引退を表明し、小泉再選に抵抗した野中広務元自民党幹事長も自衛隊のイラク派遣に反対の活動を続けている。四氏の勇気と国を憂う熱い想いに惹かれる。

YKKとして総理の盟友であった加藤紘一氏は「大義がなかった戦争への自衛隊派遣」に一貫して反対している。昨年3月のイラク開戦時、小泉総理は電話会談でブッシュ米大統領に「あなたは大量破壊兵器廃棄の大義のために自国民の犠牲を覚悟で決断された。これを支持するのは当然だ」と述べたが、今になって総理は予算委員会の答弁で「大量破壊兵器がないと決まったわけではないでしょう。独裁政権をつぶし将来の脅威を根絶できたでしょう。」と聞き直^{きなお}っている。

昨年2月、2歳の時に父親がレイテ島で玉砕した古賀誠氏は野中広務氏とともにレイテ島を訪れたという。その時、妻子を遠い日本に残し南方の島で戦死しなければならなかった父親に語りかけた心情に胸が痛む。

情緒的、感傷的な反戦論に組するつもりはない。派遣された自衛隊員の無事を願わぬ国民は一人としていない。北朝鮮の核の脅威も切実で、それへの備えとしての日米同盟の重要性も十二分に理解できる。それでもだ。これでいいのだろうか。

派遣した自衛隊員に一人でも犠牲者が出れば世論は一斉に小泉批判に転じるであろう。米国の信頼を得る手段は他にもあるはずだ。イエスマンへの信用は脆い。辛口の助言ができる同盟国こそが真の友人ではないのか。国会内でも「隊員の無事を願う会」ができたと聞かすが、真っ先にやるべきは「黄色いハンカチ」をつけることではない。地域住民の健康と命を守る責務を負ったわれわれ医師にも、取り返しのつかない事態になる前に、この問題に正面から向き合う気概が求められている。